

2016 年 フランス海外スターージュ報告書

フランス語教育スターージュ運営委員会編

日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館

本報告書は、2016年3月19日～22日に実施された日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館主催のフランス語教育国内スタージュの修了者のうち、2016年8月にフランス（ブザンソン）で実施された教員研修コースに参加した方によるフランス海外スタージュの報告書です。

報告 1

2016 年度夏期フランス語教育研修報告書

安藤 智子

はじめに

以下に記すのは、ブザンソンのフランシュ・コンテ大学付属応用言語学センター (Centre de Linguistique appliquée, 略称 CLA) で 2016 年 8 月 16 日から 26 日にかけて行われたフランス語教育研修の報告である。同センターは約半世紀の歴史をもつ言語研究・教育機関で、夏期はとりわけ多くの語学研修者を迎える一方、外国語としてのフランス語教育 (FLE) の教授法に関連する研修も多く提供している。今夏は 2 週間の研修を 3 度開催して、計 150 人ほどの参加を得たという。会場はドゥー川沿いの CLA の建物ではなく、中心街に位置するフランシュ・コンテ大学の文学部キャンパス。周囲には昼食に手頃なレストランが多く、講義後に町を散策するのもにも便利な立地である。また、キャンパス内にスタッフ常駐の事務局やコーヒースタンドが設けられ、受け入れの配慮が行き届いたなかで研修者間および研修者と講師陣の交流が自然に進んだ。

研修者の出身国は多岐に及び、アルジェリア、エジプト、モーリタニア、スーダン、マレーシア、ブラジル、そして日本 (8 名) のグループのほか、ヨーロッパ諸国や中南米諸国、レバノン、中国からの参加者もいた。また、出身国とは別の国でフランス語を教えている者や、これから教員になる準備をしている者もおり、各地のフランス語教員事情が垣間見えた。さらに、CLA での 3 年間のフランス語学習を経て参加している者もおり、様々な視点に触れることができた。

研修の内容

研修の中心は一日に 3 時限ある講義で (1 時限は 90 分)、それぞれの時限で 7~8 つの異なる科目から選択し、計 8 日間受講する。登録は先着順で、インターネットで事前に行うか、初日の説明会后に事務局で直接申し込む。研修 2 日目までは変更も可能で、事前登録で定員に達していた講義が受講可能になることも少なからずあった。そのほかに、3~4 回で完結する講義や単発の講義、さらに美術館見学などのプログラムがあり、それらを組み合わせて所定の時間数を取得すると研修修了証が発行される。ここでは、筆者が 8 日間にわたって受講した 3 つの講義について報告しよう。

「フランス語教員のための役者術」

(Techniques d'acteurs pour professeur et formateurs de FLE)

講師は役者・演出家でフランス語教員、さらに「世界のフランス語」誌の編集委員でも

あるパイエ氏。標題のとおり、本講義はフランス語教育の内容にはいっさい立ち入らず、発声や姿勢、表情、ジェスチャー、学習者との距離など、教員の身体と振る舞いに注目したユニークな内容だった。演劇のワークショップさながらに体を動かし、表情や身ぶりや声の高さを変えて効果を確認したり、授業の様々な場面を想定した即興の模擬授業を交代で行うなどした。貴重な実験の機会であり、他人の目で自分の授業を見直す契機となった。

「オーラルの練習を活発に」

(Dynamiser les pratiques de class à l'oral)

CLA 外から招聘されたスタンゼフスキー氏は、講義の内容もさることながら、受講者一人一人に意識の行き届いた授業運営が見事であった。8日間の前半はおもに概論で、学習者の発言を促す方法や教材の選び方、誤りを訂正する方法や評価の考え方などが論じられた。春の国内研修で扱われた内容と共通する点も多かったが、具体例から新たな視点を得ることもあり、我が身を振り返るよい機会となった。後半はフランス語の「聞く」「話す」力を伸ばす様々な活動が紹介され、参加者同士で実際にやってみながら長所と短所を確認し、授業に取り入れる際の注意点などを話し合った。オーラルの練習はグループで行う方が効果的だが、教師が学習者のやり取りを把握できないジレンマが生じる。これについて、可能な範囲で学習者の発話を聞き取り、最後に全員に対してフィードバックすればクラス全体の力になるという助言がとりわけ印象に残った。

「(外国語としての) フランス語の授業で文学を教える」

(Enseigner la littérature en classe de français langue étrangère et seconde)

講師のコスニエ＝ラファージュ氏は CLA で標題の授業を実践しており、また作家としても活動している。8日間のうち1日は地元の書店見学にあてられ、店主からフランスの出版界の事情を聞くことができた(写真①)。講義では、学習者が文学にたいして示しがちな抵抗を取り去り、各人が作品から受けた印象を大切にしながらグループで理解を深める方法が紹介された。たとえば、詩の朗読を聞かせてから“見えたもの”を自由に書きださせ、全体で共有したうえでテキストを読ませたり、2つの朗読を聞き比べて、違いを論じることで作品理解の手がかりとするなど、朗読から始まる授業が多かった。ほかにも、グループごとに異なる課題を与えて作品を分析させ、つぎにグループを再構成して全体的な見通しを得られるようにするなど、多様なグループワークが提案されていた。また、最後は産出の時間を与えることが重視され、扱ったテキストを記憶により再現する(書き出す)作業や、ペアでの朗読発表、授業内容を反映したりレポートなど、フランス語の力をバランス良く伸ばし、創造性にも富んだ授業例だった。

全体として6つの講義を受講したが、学習者の立場になって講師の振る舞いから学ぶことが多くあった。様々な発言や反応を受け止めつつ、主題から離れることなく授業を進める講師たちは驚くほど自由である。あらかじめ引いてある線をなぞらせるのではなく、学習者の知性と口と手が活動する場を与えられるよう、学習事項への適切なアプローチを検討して今後の授業運営に役立てたい。

おわりに

研修は世界のフランス語教員たちと出会う貴重な場であった。豊かな国際性を実感したのは、研修者が国ごとに歌や踊りを披露する催しである。会場はブザンソン市立ホールで一般市民にも公開され（写真②）、見応えある内容だった。日本の参加者も混声合唱を披露し、連日の練習の甲斐あって大いに好評を得たところである。それぞれの持つ良きものを出し合い、認め合って楽しむ様子は、講義のなかで学んだこととも通じて思い出かい一場面となった。なお、今年度は日本人8名が同じ日程で研修に参加したことで、上記の催しにおいて存在感を発揮したほか、出席している講義の情報を交換したり、今後の授業運営について実情にそった論議もでき得るところが多かった。同行の研修生たちに感謝したい。

結びにかえて、今回の研修派遣に際してお世話になった日仏関係者の方々、研修先の講師・スタッフ、ともに学んだ各国の参加者に御礼申しあげる。



写真① アントランキユー書店の見学



写真② ブザンソン市立ホール「クルサール」

報告2

ブザンソン・スタージュ報告書

大須賀 沙織

2016年8月16日から26日まで、ブザンソンのCLAにて、フランス語教育スタージュに参加させていただいた。8月14日にパリ到着、NationのNouvel Hôtelに宿泊し、15日の朝、Gare de Lyonからブザンソンに移動。ブザンソン駅でほかのスタジエールのみなさんと合流してトラムに乗り、宿泊先のRésidence Zenitudeに落ち着いた。16日の午前中にオリエンテーションがあり、午後からさっそく授業が始まった。スタージュが行われたのは、町の中心部にあるフランシュ＝コンテ大学であった。以下、私が受講した授業について報告する。

Modules

1. Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement (Régine Llorca)

フランス語の語句や文章の流れを体でどう感じとらせるか、いくつかの実践方法を体験することができた。クラス全員で立って輪になり、体を動かし、声を出し、簡単なメロディーに乗せながら行うアクティビティが多く、楽しみながら参加し、毎回あっという間の1時間半であった。ただし、内容的には、即興で簡単な文章を組み立てる語彙力と、リズムに乗せて発音する感覚的能力が必要で、日本の大学で行うには、中級以上のかなり積極的なクラスでないと実践はむずかしいように感じた。教員の側にも、受講者を流れに乗せて引っ張っていくだけの技術（身体能力とリズム感）とエネルギーが必要である。誰にでもできる授業ではないが、音声のしくみを生き生きと体感させる方法として、いつか機会があれば、きちんと準備して取り入れてみたいと思った。

2. Observer et analyser des pratiques de classe (Raphaël Bruchet)

どのような点に注意しながら授業準備をし、授業を行ったらよいか、さまざまな評価ポイントを学ぶことができた。受講者から出されるさまざまなアイデアや意見の要点を汲み取り、板書にまとめていくBruchet先生の姿が印象的だった。2週目には、実際にCLAの語学クラスを見学する機会が与えられた。授業評価のポイントが細かく記された「Grille d'évaluation」をもとに、2人ずつのグループに分かれて授業見学を行った。翌日と翌々日の授業で、見学したクラスについて報告とディスカッションが行われた。Bruchet先生は、ネガティブな意見に対しても常に理解を示し回答してくれるので、発言を恐れなくてもよいという安心感があり、教える側の姿勢として学ぶところがあった。

3. Perfectionner ses compétences en langue écrite et en grammaire (Philippe Richetto)

教えにくい文法事項をどう教えるか。Richetto先生の解説を聞いて、その後実際に文法問題を解きながら、間違いやすい点や曖昧な点を確認する授業だった。すでにフランス語を教えている私たちにとっては自明の事柄もあったため、2週目は、詳しく学びたい文法事項についてこちらからリクエストし、それに応えていただく形になった。少人数クラスであったこともあるが、先生は受講者の希望を快く受け入れ、翌日にはそのテーマを扱ってくださったので、満足感の得られる授業であった。

Forums

1. Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources (Alix Pelé)

CLA の豊富なフランス語教育関連資料の紹介がなされた。カタログ検索実習のあと、図書館配架資料を案内していただいた。もう少し長い滞在であれば、足を運んでさまざまな資料を閲覧してみたいと思うメディアテークであった。CLA のサイトからフリーで利用できる電子資料の紹介もあった。

2. Organisation et actualité du système éducatif français (Jean-Paul Tarby)

フランスの教育制度の概要と問題点を概観する授業。もっとも印象的だったのは、冒頭で講師の方が Google を開いて « système éducatif français » と入力し、« Actualités » (ニュース) の見出しから、« La langue arabe officiellement dans les écoles françaises » という最新の記事を紹介してくれたことであった。

3. Découvrir le Musée du Temps et le Palais Granvelle (Iris Kolly)

時の博物館（グランヴェル宮殿）を訪れ、ガイドの方の解説を聞きながら館内見学。時計産業が盛んであったブザンソンならではの博物館である。各種時計と大時計のコレクション、時をテーマにした展示物は一見の価値があったが、見学のはじめに中庭で解説してもらった、ブザンソンがブルゴーニュ伯領であった時代の回廊や階段式屋根も興味深かった。

4. Anxiété communicative de l'enseignant et de l'apprenant : dépassons nos limites ! (Cécile Medina)

教員と学習者とのやりとりにおけるコミュニケーション上の不安、という問題設定そのものが、私にとっては示唆的で、こうした側面を意識的に考えるきっかけとなった。ブルターニュ方言や南仏方言を使いこなす先生で、方言への興味もそそられた。

5. Victor Hugo, ses engagements et ses combats, d'hier à aujourd'hui (Arlette Burgy-Poiffaut)

ユゴーの家を訪れ、館員の方の解説付き見学。ユゴーとブザンソンとのつながりをたどることができる展示がなされており、ブザンソンで生まれたユゴーの戸籍や、ユゴーのブザンソンへの愛着を示す « Par M. Victor-Marie Hugo, de Besançon » と名を入れた詩の 1 ページなどを見ることができた。ユゴーの生家でひとときたたずむことができ、感慨深いものがあった。

その他 : Haut Doubs 観光

日曜日にバス観光に参加。Château de Joux は標高が高く、夏でも城内は冷え切っているため、見学には厚手の防寒具が必須である。お昼はフランシュ＝コンテ地方の郷土料理とアルボワのワインを味わった。スイスを対岸に臨みながらのクルージングは森林とドゥー川の新鮮な空気を吸うことができ、リフレッシュすることができた。

おわりに

8時半から17時まで（2週目は15時半までの日もあった）のスタージュはそれなりにハードで、猛暑の中の移動など体力を消耗したが、日本からのスタジエール全員無事研修を終えることができた。ブザンソンは自然豊かで、世界遺産でもある城塞があったり、郷土料理の楽しみもあつたりと、2週間の研修先として大変居心地のよい街であった。今回滞在をともにした日本人研修生のみなさんとは行動を共にすることが多く、楽しく充実した時間を過ごさせていただいた。最後になりましたが、スタージュを運営していただいたみなさま、フランス大使館と Campus France 関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。

報告 3

2016年ブザンソン夏期スタージュ報告書

太田 悠介

はじめに

8月後半の2週間にわたって、フランシュ・コンテ地方の町ブザンソンにあるCLA（「応用言語学センター」）で、フランス語教員向け研修に参加した。今回の夏期スタージュでは、教員の個性が強く打ち出された授業が多かった。教員は読む、聞く、話す、書くといったフランス語をかたちづくる各要素に特化した授業を行っていた。春に開催された東京でのスタージュでは、ヨーロッパの現行の外国語教育の基準や方法を中心に学んだが、ブザンソンでは教室で求められるより実践的な技術を身につけることになった。その意味でふたつのスタージュのあいだの連続性が感じられた。このような機会を与えてくださった関係者の皆さまには、心よりの感謝を申し上げたい。

モジュール、アトリエ、フォーラム

スタージュはモジュール、アトリエ、フォーラムという三種の系統に分かれる。モジュールとアトリエは講義形式であったり演習形式であったり、あるいはまたその組み合わせであったりと担当の教員によってさまざまである。モジュールに比べてアトリエの方が受講者の主体的な参加を求める講座として設定されていたようだが、他のスタージュ参加者の話などを総合すると、必ずしもそういうわけではなく、これも教員それぞれの判断にまかされているようだった。フォーラムにはCLAの図書館の紹介やブザンソンの美術館訪問などがあり、広義の文化講座にあたる。モジュールを中心に時間割を組み立て、これにアトリエとフォーラムを合わせて規定の単位を取得する。私は以下の4つを選んだ。

Module 1 : Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement (Régine Llorca)

フランス語教育のかたわらフラメンコのダンサーでもあるというLlorca氏の肩書きにたがわず、フランス語特有のリズムやイントネーションを活かした授業であった。たとえば、フランスの都市名に韻とシラブルを同じくする語を組み合わせる短文（A Nice/caprice, A Quimper/deux vieux pères）をつくり、これに手拍子や足踏みをつけてかけあいをするといったものである。こうしたアクティビテを受講者同士で実際に演じて覚えてゆくというかたちで授業が行われた。自身の考えを率直に話すLlorca氏の人柄にもたすけられて、各国から集まった受講者間の議論が白熱するというような時間もあり、その点も印象に残った。

Module 2 : Apprendre et enseigner avec la chanson francophone (Nicole Poirié)

シャンソンを題材としていかに授業を組み立てるかを考える授業であった。Poirié氏はフランス人ならだれでも知っている有名な曲から、近年の **slam** と呼ばれるラップ調の曲まで幅広く紹介していた。そのなかから受講者が一曲選び、学生のレベルや授業の目的を設定したうえで、模擬授業を実演するというのが主な内容である。Poirié氏はシャンソンの紹介に徹するといった様子で、模擬授業の組み立て方は受講者に任される。東京のスタージュでの模擬授業を踏まえ、また今回のスタージュで得た知見を活かしつつ、さらに一步踏み込んだ模擬授業を作ってみたい人にはよい機会だと思う。

Module 3 : Perfectionner ses compétences en langue écrite et en grammaire (Philippe Richetto)

フランス語を教える教員の文法知識を深めることに主眼を置いた授業である。冠詞、時制、仮定法、接続法など、外国人には必ずしも自明でないフランス語の特徴の解説と復習が丹念に行われた。文法を学んだり教えたりする際に必要とされる一般的な知識からこぼれる例外的な文法事項、さらに例外のなかの例外といったように順次説明がなされ、かゆいところに手が届く授業という印象をもった。それと同時に、Richetto氏は前日に出された受講者の希望に応じて、翌日に扱う内容を変えて授業を進めるなど、柔軟さも備えていた。

Atelier : Atelier d'écriture créative (Philippe Richetto)

文章の創作に特化した講座。創作などと言われて当初は敷居が高いように思ったが、初級文法を学んだ学生であれば対応できるアクティビテなども提示され、文章を書くように促すためのアイデアが豊富な授業であった。たとえば、一組の男女の物語を複数人で互いに内容を隠したまま一文ずつ書き足してゆく **Cadavre exquis** である。複合過去あたりまでの知識があれば、たとえ短文しか書くことができなくとも、創作の楽しみを味わうことのできる好例だと思う。もう少し難易度の高いものとしては、(ブラック) ユーモアとリアリティを併せもった新聞の三行記事風の文章を短時間でいくつも書くといった課題があった。今後の授業のための着想を得ると同時に、個人的にも午後の楽しい一時を過ごすことができ、スタージュを締めくくるにふさわしいアトリエだった。

おわりに

本報告の最後に、8月後半のスタージュに組み込まれている **Soirée internationale** について述べておきたい。**Soirée internationale** では、参加者は自国の紹介を兼ねて出し物を披露する。参

加するかどうかは各人の自由ということだったが、ふたを開けてみれば、町の劇場を舞台に歌ありダンスありの大変に熱の入った催しだった。夏のあいだに CLA に世界各地からスタジエールが集まるということはブザンソンの人々には周知のことで、ヴァカンスのお祭りとして *Soirée internationale* を楽しみにしている様子だった。今年の本からの参加者のあいだでは合唱という案が出て、私も参加させていただいた。授業が終わってからの連日の練習はそれなりに大変ではあったが、今となってはブザンソンでの夏の日々を彩る忘れがたい情景である。温かく迎えてくれたブザンソンの町の人々にとって、合唱がささやかな恩返しとなったのであれば幸いである。

報告 4

2016 年度 夏期フランス・スタージュ 報告書

柿並 良佑

以下に報告するのは、8 月 16 日～26 日にブザンソンの CLA (Centre de Linguistique Appliquée de Besançon) にて開催されたフランス語教員のためのスタージュの概要である。

プログラムの概要

週末を除く各日、24 の選択肢の中から 3 つのモジュールを選び(午前 2 コマ、午後 1 コマ)、8 時 30 分から 15 時まで受講するというシステムである。また、15 時 30 分からはフォーラムとアトリエが開催され、期間中、両者の内から最低 4 つは出席しなければならない。なお、モジュールの登録は日本にいる間にオンラインで済ませておくとスムーズ。最初の二日間は変更可能。

モジュール

私が受講したモジュールは以下の通り。

- 1. Dynamiser les pratiques de classe à l'écrit (Staniszewski, Venceslas)
- 2. Apprendre et enseigner avec la chanson francophone (Poirié, Nicole)
- 3. Enseigner la littérature en classe de français langue étrangère et seconde

(Cosnier-Laffage, Frédérique)

1 のモジュールは、作文などのクラスをいかにオーガナイズするかというテーマで進められた。初回の授業では簡単なゲームを交えてアイス・ブレイクに十分な時間が割かれた。そのためか、およそ 25 人という大人数にもかかわらずクラス全体の雰囲気は終始活気がありつつも和やかであった。

授業は基本的に毎回参加者がグループ・ワークをしながら、作文に必要な Hypothèse – compréhension globale – compréhension détaillée – systématisation ...といった基本的な段階に沿って進行する(この段階の順番についてもまずは受講者同士で話し合う)。

概して作文の授業となると習熟度を要求するが、漫画 Stromph を使って意味の分からない単語(ex. « Maman, je stromphe ! »)を普通のフランス語に置き換えさせる、3 つの短文を 3 人の異なる学生に書かせて文章を作る、バラバラになっている映画のあらすじとポスターを正

しく組み合わせる、等々、ゲーム感覚のアクティビティはアレンジを施せば日本の初級～中級クラスでも取り入れることができるように思われる。

担当講師の入念な準備、受講者に喋らせる際の控えめながら適度な介入等、見事にオーガナイズされた実践的モジュールであったと言える。

2のモジュールは、文字通りフランス語の歌をいかに授業に取り入れるかがテーマ。担当講師が曲と歌詞を用意しているので最初はそこからいくつかを取り上げ解説を聞く。この時点では歌を題材にした文化論的色合いが強い。その後、グループワークで一曲を題材に具体的なレベルを想定して、どのように授業を組み立てるかを考える（ただし受講者が少なかつたため、二人ないし一人での作業となった）。模擬授業ではなく、考えた授業プランに適宜講師がコメントしていくというスタイル。全体的にすでにフランス語の歌を授業に十分に取入れている人にとっては得るところは多くない。

3のモジュールでは文学作品をどのように授業に取り入れるか、というもの。カミュ『異邦人』の朗読聞き比べ、目を閉じて文学作品の一節を聴き情景を想像する、またそれらを通じたディスカッションなど、概してレベルの高い実践的アクティビティが多く、日本の大学で扱うには難しいと思うものが多かった。ただプレヴェールの詩を二人組になって朗読させる（身振り手振り、分担などはペアに決めさせる）、シンプルな構成を持った詩の「続き」を書く、といったアクティビティは初級後半～中級のクラスにも応用可能だろう。

前年度の報告にもあったように、本スタージュの参加者の国籍は多岐に富んでいたが、特にアルジェリア人が多い。その大部分は *Ecole Normale Supérieure* の学生であって教授経験はなく、ディスカッションなどでもよく発言するが、本スタージュに要求しているものが日本人参加者とは大きく異なっていることが多かったように思われる。

フォーラムとアトリエ

私が受講したフォーラムは « *Anxiété communicative de l'enseignant et de l'apprenant : dépassons nos limites !* » (Medina, Cécile)、アトリエは « *Français familier et argotique* » (Richetto, Philippe) である。フォーラムは1コマ完結、演劇的に飛び回る講師で、いかに学生および教師の緊張をほぐしていくかがテーマ。身振り手振りの重要性は見ていて面白いものではあるが、日本の大人しい学生は「ドン引き」するかもしれないので要注意。

アトリエは1コマずつ三日間にわたって日本ではおなじみの講義形式で受講する。口語表現を歴史的かつ体系的に学ぶ機会は少ないので貴重な時間であった。加えて講師の話し方や

立ち居振る舞いが実に個性的なので、その点を楽しめるかどうかも重要かもしれない。受講者の質問には丁寧に答えていて、翌日、補足のプリントが用意されたりもしていた。

滞在について

研修が行われるブザンソンは小さいながら建物の白さが際立つ明るい街である。CLA からバスないし徒歩で行くことのできる世界遺産シタデル（城塞）には博物館等が併設されており、じっくり観るなら一日時間が潰せる。

日本人参加者同士も顔を合わせる機会は少ないので、滞在期間中は CLA 付近のレストランや物産展などでランチをとった。買い物は徒歩圏内の Monoprix や宿泊先近くの小さなスーパーTahel で用が足りた。この地方独特の黄ワイン vin jaune も Nicolas や Monoprix で買うことができる。

滞在中は、参加者向けに様々な催しがある。週末日曜は Haut Doubs 観光に参加した (stagiaire 無料)。今年は記録的な酷暑となりブザンソンも日中はかなり暑かったが、Château de Joux を訪ねた時は曇天で相当の冷え込みであった。参加される場合は防寒対策をしっかりとされることをおすすめする（過年度は、市内でも夜には相当冷え込んだらしい）。その後スイスの国境付近を船でめぐった時は天候も回復し、新鮮な空気を味わうことができた。

宿泊先の Résidence Zénitude では食器付きのキッチン、無線 LAN (ただし接続速度は遅い) が利用できる。CLA までは徒歩 15 分程度だが、一週間 2 ユーロで登録できるレンタサイクル Vélocité を利用すれば 5 分程度で大変便利 (パリの Vélib のようにしょっちゅう壊れているようなことはなかった)。

期間中、各国の参加者が出し物を披露する soirée internationale が開催されるが、日本組は男女混声合唱で 2 曲披露。練習はほぼ毎日行ったが、他の国の参加者との交流にとっても効果的なので、時間が許すようであれば相談の上、何か出し物を検討してもよいと思う。部活の合宿みたいな雰囲気になります (笑)。

おわりに

モジュール選択の柔軟さ (ex. 前半と後半で別のモジュールを選ぶことができる、など) などの点で要望はあるものの、全体として実りのあるスタージュ経験であった。一般的なフランス留学とも異なり、アフリカや東南アジアからの研修生と交流できたこと、また各地のフランス語をめぐる状況を知りえたことの意味は大きい。文学などの「高尚な」題材を取り入れる際の困難は同じヨーロッパ語圏でも同様であるが、他方、CECRL に則った FLE の枠組みが必ずしも普遍的基準として機能しない日本でのフランス語教育を改めて振り返る機

会にもなった。日本からの参加者は8名であったが、空き時間にかなり各モジュールの内容について情報交換できたことも今後の授業にとって有益となろう。

末筆ながら、本研修用の奨学金を認めていただき、また諸手続きを進めてくださった関係各位にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

報告 5

夏期フランス・スタージュ報告書

近藤 野里

1. はじめに

私が参加したのは 8 月 16 日～26 日にブザンソンの CLA (Centre de Linguistique Appliquée de Besançon)、およびフランシュ＝コンテ大学(l'Université de Franche-Comté)にて開催されたフランス語教員のためのスタージュである。2 週間のうち週末を除いた 10 日間、8 時半から 15 時 (17 時) までの研修を受けた。

2. 生活情報

パリ到着時：パリに到着し、空港の到着階の出口で Campus France の運転手さんが待機していただき、まずは奨学金を受け取ることができる空港内の両替所に案内してもらえた。その後、パリ市内のホテルまで車で送っていただいた。TGV でブザンソンに出発する前日にパリに到着する場合には、1 日分の宿泊補助が許可された。宿泊は Nation 広場の近くの Nouvel Hôtel であった。

ブザンソンでの宿泊場所：日本人教師は Résidence Zénitude に宿泊した。Zénitude には wifi、ドライヤー貸し出し (数は多くない)、洗濯機 (1 台、8 時から 20 時) などのサービスがある。簡単な洗濯は手洗いで済ませることもできるので、小さな洗濯干しを持っていくのもよい。部屋にはキッチン (電子レンジ、冷蔵庫、フライパンや食器なども完備) がついているため、簡単な自炊もできる。Zénitude から研修場所のフランシュ＝コンテ大学文学部までは徒歩 15 分ほどである。また、Zénitude 周辺に小さなマーケットがあるが、食料品の買い出しは街中にある Monoprix で済ませることが多かった。

3. スタージュについて

3.1. プログラムの概要

各日、約 20 の選択肢の中から 3 つのモジュールを選び、8 時 30 分から 15 時まで受講するというシステムである。また、15 時 30 分からはフォーラムとアトリエが開催され、期間中 4 つを受講するのが義務である。アトリエの内容は « Le français familier et pédagogique » や « Atelier d'écriture créative » といったフランス語教育に関わるものであり、フォーラムはフランス文化やフランシュ＝コンテ地方の地域紹介に割り当てられている。

3.2. モジュール

私が受講したモジュールは以下の通りである。

- (1) Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement

(2) Se perfectionner à l'oral

(3) Pédagogie de l'oral : favoriser les interactions en classe de FLE

(1)のモジュールは、発音をリズムや身体の動きを通していかに教えるかというテーマで、楽しい授業だった。母音や子音をひとつひとつ練習する音声学的な授業ではなく、フランス語に特有なリズムやイントネーションを体の動きを通して練習する方法を学ぶことが主だった。例えば、1～4音節の表現や文章を即興で考えながら、リズムに合わせて拍子を取り、順に言っていくとか、自己紹介に関してもフランス語風に言えるように音階やリズムに合わせて発音するなど、今までに見たことのないタイプの発音の授業だった。授業の余った時間などに、このような方法を取り入れれば、授業にメリハリをつけることができるはずである。

(2)のモジュールは、フランス語教育の授業というよりは、どちらかというと語学学校の授業に近い内容であった。人前で話す訓練をするという趣旨の授業であり、「テレビの司会者のようにクラスメートを紹介する」、「寸劇を披露する」といったアクティビティや、フランス語の慣用句やスラングについて親しむためのアクティビティなどが行われた。報告者としては、授業自体の内容についてはさほど満足度が高かったとは言えないが、担当教員の授業中の立ち振る舞いや授業で使用したゲームなどについては大変参考になった。ゲームに関しては、①2人の生徒が与えられたテーマ（例：média, écologie, famille）について思いつく単語を交代で言い、制限時間直前にひとつ多く答えた方が勝ちというようなもの、②部分的に綴り字が書いてあるカードを配って、その綴り字を語頭、語中、語尾に持つ単語を制限時間内に言うといったものなどがあつた。これらのゲームは、日本での授業でも少し工夫をすれば取り入れることができるはずである。

(3)のモジュールのテーマは、オーラルの授業で学生間のやり取りを促すために、教師はどのようなアクティビティを提案できるかというものであつた。報告者としては、3つのモジュールの中で、日本での授業で取り入れたいと思う内容が最も多いと感じたモジュールだった。授業では、担当教員 **Claire Mallet** 先生が実際に用意したアクティビティを、参加者が学習者として行い、その過程で学生間にどのようなやり取りがあるだろうか、もしやり取りが十分でなかったら教師側は何に気を付けるべきかを考えるというものだった。実際に行ったアクティビティは、「グループで話し合いながらブザンソンの街の地図を描く」、「映像を見ないで聞いた映画の音だけを頼りに話を作る」、「ブザンソンのプロモーションビデオを作成する」、「グループで描いた宇宙人の絵をフランス語で説明し、他のグループに絵を描いてもらう」、「発明品のセールスマンになって、商品の宣伝をする」というようなものである。また、**Mallet** 先生は、授業の合間で実践できるゲームなどや発音の指導の仕方などについても積極的に紹介してくれた。

3.3. フォーラムとアトリエ

私が受講したフォーラムは « Comment s'organise la scolarisation des enfants (de) migrants en France ? », アトリエは « Le français familier et argotique »である。「Comment s'organise la scolarisation des enfants (de) migrants en France ?」では、講演者がフランシュ＝コンテ地方に移民として移り住んできた子供たちに対する、フランス語と他の科目をバランスよく学ぶための学習プログラムの紹介や様々な問題点について、映画『バベルの学校』の抜粋を見せながら説明するというのもであった。

アトリエの« Le français familier et argotique »は、français familier と français argotique の違いの説明、verlan の紹介、発音の違い（間違ったりエゾンなど）について概観するものであった。これらが使用されている BD の抜粋を読んだりすることもあったが、基本的には講義タイプのアトリエであった。

4. ブザンソンについて

ブザンソンは小さな美しい街であり、バカンス中のせいもあるのだろうが、川が流れるのんびりした街という印象が残った。見所は世界遺産に登録されているシタデル（城塞）である。中には動物園やフランシュ＝コンテ地方を紹介する博物館、そして Musée de la Résistance et de la Déportation というレジスタンス運動などの歴史を扱う博物館があった。博物館の展示が充実しているため、3時間の滞在時間はあっという間に過ぎた。また、動物園は城塞を上手く利用した作りになっていた。中心地には、Maison natale de Victor Hugo（CLA 学生は1.5ユーロ）、ブザンソンの街や時計の歴史を扱う Musée du temps（CLA 学生は無料）がある。滞在期間中は、大学近くのレストランでお昼を食べる機会も多かった。お勧めしたいのは、文学部がある Megevand 通りにある Restaurant Au Pays である。店主が一人でやっている素朴なフランス料理を食べることができる店で、客層は基本的に地元の人々である。授業の課題でブザンソンのプロモーションビデオを作成した際に、このレストランの店主の方にインタビューをお願いしたら快く引き受けてくれた。

滞在中は、参加者向けに様々なアクティビティが提供された。週末の Haut Doubs への観光は、なかなか個人では行く事が難しそうなスイスの国境付近の村を訪ねるというもので、ほとんどのスタジエールがこれに参加していた。その他、沢山の文化イベントがあったようだが、参加するための時間が十分ではなかったのが少し残念であった。

5. Soirée internationale について

日本人参加者の間で出発前に既に Soirée internationale で出し物をしようということになり、参加者の一人が合唱の経験者、もう一人がピアノの伴奏をすることが可能ということで、「ふるさと」と「いつも何度でも」を歌うことに決まった。楽譜はありがたいことに参加者の一人に準備

していただき、ブザンソンでのスタージュが始まってからは夕方に 1 時間半ほど練習を行った。当日の発表も成功し、他の国の参加者から私たちの合唱が良かったと褒められて、大変良い思い出になった。今後、スタージュに参加する方々にも参加を勧めたい。出発前は忙しいとは思いますが、事前に連絡を取り合うなど、準備をしておくことを勧める。

6. おわりに

本スタージュに参加したことで、フランス語教育の方法について沢山のことを学ぶことができた。モジュールやアトリエの内容も充実していたが、様々な国から参加しているフランス語教師や将来フランス語を教える予定の学生と知り合えたことは、大変な刺激となった。日本でのクラスの人数が多すぎるのではないかと思っていたら、スーダンやモーリタニアではその倍の人数が一クラスにいると聞いたことや、アルジェリア人の女子学生がそれぞれ持つフランス語教育への考え方、また様々な意見を耳にすることができた。日本人学生を留学へ送り出す側の教員としては、彼らが様々な背景でフランス語を学んできた人々に留学中に会えるのだなと気づくことができ、日本でのフランス語の授業でも機会を設けてブザンソンで出会ったスタジエールから聞いた話などをしてみたいと思った。ブザンソンでのスタージュで学んだことを、今後も授業で活かせるようにしていきたいと思う。最後に、このスタージュに参加する機会を与えていただいた全ての関係者の方、また一緒にスタージュに参加したスタジエールの方々にここで感謝の気持ちを伝えたい。ありがとうございました。

報告 6

2016年8月ブザンソン研修報告書

2016年8月16日から26日まで、フランシュ・コンテ大学（フランス・ブザンソン）CLAにおいて、Formation pour professeurs et formateurs de FLEに参加した。本スタージュは、3つのModuleと4つのAtelierもしくはForumから構成されており、受講者個人の関心や必要に応じて、自由にとることができる。以下、受講したそれぞれについての概要を簡潔に述べる。

Module 1 : Techniques d'acteurs pour professeurs et formateurs de FLE

発声の仕方、話し方、ジェスチャーの使い方等、教員としてのテクニックをビデオで学び、それぞれが実践してみた。クラスは、10名程度で、よい雰囲気の中、リラックスして受講できた。

Module 2 : Concevoir des activités pédagogiques à partir de documents authentiques

オーディオ、ビデオ、テキスト等の教材の集め方、使い方を学ぶ。同じような内容の2つの教材を比較して、どちらが教材としてふさわしいか、その理由等を受講生が考え発表し、教員が解説するという形式や、1つの教材からどのような授業をするかを2~3名程度で考え、発表し、議論するという形式であった。

Module 3 : Méthodologie du FOS/FOU

職業や大学における、いくつかの専門分野におけるフランス語教育の方法について、ビデオやテキストを用いて、学ぶ。扱った分野は militaire, justice, diplomatie, tourisme, médecine 等であり、主に、B2/C1の学生を対象とした授業の組み立て方を学んだ。受講生のほとんどが、大学やアリアンス・フランセーズ等でフランス語教育に携わっており、すぐに実践できることを考慮したものであった。

Forum : Organisation et actualité du système éducatif français

フランスの教育システムとその現状について、講義をきく。受講生それぞれの国の言語教育の現状・問題点についてのアンケートにもこたえた。

Forum : La démarche qualité appliquée à l'enseignement des langues

それぞれの国に、語学のレベル分けの基準が設けられており、フランス政府が定める、フランス語のレベルの基準の説明があった。日本も例に出されていた。

Forum : Anxiété communicative de l'enseignant et de l'apprenant : dépassons nos limites

語学のクラスにおける教員と生徒の間の、コミュニケーションの取り方についての講義をきいた。

Forum : Victor Hugo, ses engagements et ses combats, d'hier à aujourd'hui

ブザンソンにあるヴィクトル・ユゴーの生家を訪れ、その生涯についての説明をきく。

ブザンソンは小さな街で、安全に過ごすことができ、週末は、CLA 主催のバスツアーに参加できたり、天候にも恵まれ、研修の他にも、滞在を楽しみことができた。Module の内容については、日本の大学においてすぐに実践可能なものばかりというわけではないような気もしたが、フランスにおいて行われているフランス語教授法を知ることができ、今後の参考にすることができた。貴重な機会を与えていただいたことに感謝し、お礼を申し上げたい。

報告 7

ブザンソン CLA 夏季フランス語教員研修の報告

2016年8月16日～8月26日までの二週間にわたり、フランシュ・コンテ大学付属のCLA (Centre de Linguistique Appliquée) においてフランス語教員養成講座を受講した。CLAの教師陣は、さまざまな年齢・国籍の研修生を相手に教鞭をとることに慣れており、その授業内容のみならず、多様な背景をもつ学習者たちとの関係性を考えるうえで学ぶところが多かった。私的な領域に入り込むことなく、かといってそれぞれの個性を否定することもなく個々人の意見を活かしていくという授業のあり方には深く感銘を受けた。FLEの理論や教科書の使い方を学んだ東京でのスタージュに加えて、ブザンソンでは受講者の多様性を踏まえた実践に移行するという二つの段階を踏めたことは非常に有意義であった。

スタージュ運営関係者の方々、滞在を共にした研修生たちには心から御礼申し上げる。

以下に、今回の研修内容を振り返りながら詳細をご報告したい。

宿泊施設および生活全般について

わたしたち日本人の参加者は、Zénitude と呼ばれる滞在型ホテルに宿泊した。政府の給費を受けてCLAに来ていた他国の参加者もこちらに宿泊したようである。小キッチン・シャワー・トイレが完備され、居室もこざっぱりとして滞在期間中は非常に快適に過ごすことができた。週に一度の清掃が入る。シャンプー・石鹸に代わる洗浄液は備付だが、ドライヤー・アイロンといった家電はない。女性は小さな海外用ドライヤーを携帯すると良いと思う。

研修の行われたフランシュ・コンテ大学文学部へは徒歩15分ほどの立地で、ドゥー川に近い。周辺には居心地よい公園もあり、毎朝きれいな空気の中を登校するのは一つの楽しみであった。Resto Uはこの宿泊施設からすぐ近くにあるが、大学からは歩いて15分かかるため、昼食の際に戻ることはなかった。急げば十分に昼食をとれる距離ではある。

街は昼間も夜間も非常におだやかで静かであり、安全面で心配になることはなかった。日中は忙しいうえに日差しが強くてままならない散歩なども、夕暮れ以降に楽しむことができた。しかし日本の街中と違って照明は少なく暗がりが多いので、注意は必要であろう。車通りは多くないため、パリのVélib'に相当するVéloCitéを使えば移動に便利である。

研修の初日には、研修生用の在学証明カードがもらえる。これを提示することで美術館や映画などが無料になったり、割引される。しかし、連日の授業が8時半から17時までとなると、閉館前に街歩きをするにはなんとか時間を捻出しなければならない。

フランス語教員研修について

①時間割および授業登録

前年までの報告書にあったとおり、本研修では、三種類の Module を月曜から金曜まで必ず受講するというのが基本である。一時限目 8:30~10:00、二時限目 10:30~12:00、三時限目 13:30~15:00 というスケジュールで、三十分の休憩時間には各国の研修生たちとの歓談はもちろんだが、登録変更などの事務手続きが入ることもある。Module の終了後、15:30~17:00 には、各自が選んだ Atelier（三回あるいは四回連続受講）、または Forum に参加することになる。

Module の登録は初日の朝にしたのだが、渡仏前から CLA のインターネットサイトで事前登録することができたようであった。このため、初日にはすでに多くのクラスが満員となっており、希望クラスの目星をつけていたものやむなく変更せざるをえないという事態になった。しかし、授業が始まって数日のあいだに登録変更期間が設けられており、かなりの人がクラス変更を申し出たため、最終的には空きがでたというケースもあった。このような登録状況のなか、初日以降の数日間は先生方も研修生も浮き足立っていて落ち着かなかつたが、一週目が終わる頃には受講ペースも確立されて生活にもゆとりが持てた。今後の研修生には、オンラインでの Module の事前登録をお勧めしたい。

②Module

今回、二十三種類もの講座の中からわたしが選んだのは、以下の三つである。二週間この授業を受けることになるが、さまざまなタイプの教授法を経験できるためには、一週目と二週目に別の講座を受講できればよかったと思う。この点に関しては、スタージュ責任者の H  l  ne Vanthier 氏に申し出てみたところ、そのような可能性は考えなくもないという。来年以降、変更があるかもしれない。

・ Enseigner la phon  tique par le rythme et le mouvement (R  gine Llorca)

音声学の理論的なことを学ぶというよりは、フランス語の音やリズムを体に浸透させることを目的とした遊戯性の高い授業である。手拍子や足踏みをしながら、歌うようにフランス語の文章を発音するというのが主な活動であるが、その際、「弧を描くようなアクセント (l'arc accentuel)」や「節をつけた音階 (l'  chelle m  lodique)」といった独特の概念が導入された点が興味深かった。音の高低、リズム、アクセントの位置に気を配りながら普段聞きなれたはずのフランス語を発音し直す作業は、これまでの自分の癖を見直す良い機会となった。ヨルカ氏の授業内容をそのまま日本におけるフランス語教育に導入するのは難しいが、ともすれば読経のように平板になりがちな日本的アクセントとの甚だしい相違について、身をもって知っておくということに意義があると感じた。

• Concevoir des activités pédagogiques à partir de documents authentiques (Claire MALLET)

この授業では、実際にフランスの社会で流通しているあらゆるタイプの資料をもとにして語学授業を組み立てる方法を考える。例えば、映画の予告編（音声＋映像）、環境保全を呼びかけるポスター（写真＋文字）、ブザンソン市から届いた家庭ゴミの分別方法のお知らせ（絵＋文字）など、すべてが実在する資料であり、人工的につくられた教科書と違い、学習者が「なまのフランス」を感じながら言語やフランス社会のあり方を学べる媒体である。しかし問題は、余計な情報や難易度の高すぎる文法内容を多分に含んだこのような資料を授業内でどのように取り扱うのか、という点である。マレ氏によれば、映画やラジオをただ闇雲に授業中に流して終わるのでは、学習者は何も学んだことにならない。選ぶべき資料の検討はもちろんのこと、その資料のなかに「（語学の）授業で教えるべき何かがあるのか」を明確にすることが教師側のもっとも注力すべき課題であるという。中心的課題の取捨選択によって、初学者には非常に困難に思われるような資料も意義あるものとしてとることができる。逆に、実在する資料を授業で扱う際には、レベルに応じて「扱わない部分」も明確にしておくということが必要になる。これは現行のフランス語教授法の傾向でもあろうが、「すべてを理解する」ことよりも、「実際のシチュエーションで切り抜けることができる」という点に重きが置かれている。しかし、初級者でも実際のフランスに関わりながら学ぶということは、学部生のうちから留学することができる世代にとっては重要なことであると思われるし、学習者のモチベーションの向上も期待できる。

この授業は、選択した **Module** および **Atelier** のうちでもっとも多くの考える機会を与えてくれた。資料を導入するための方法論だけでなく、現在、自分が受け持つ授業の教科書をどう使うべきなのか検討するための思考法を教わったように思う。マレ氏の徹底して論理的な語り口に、「何をどう教えるのか」について考えることの必要性を痛感した。

• Pédagogie de l'oral : favoriser les interactions en classe de FLE (Claire MALLET)

上記と同じマレ氏による講座であるが、趣向はだいぶ変わって、授業内アクティビティの充実を図るためのさまざまな方法を楽しみながら学ぶというものである。ごく簡単な文法事項（国名と定冠詞・前置詞の組み合わせなど）から、単語の綴り、テーマに基づいた発表に至るまで、学習者が協力しあいながら、持てるフランス語能力を最大限に口頭で発揮するためのアイデアが盛り込まれていた。受講者のほとんどは大学で教えているわけではなく、中学校・高校、語学学校の生徒を対象にしていたという点でニーズの違いはあったが、恥ずかしがる学習者に口頭でフランス語を使わせるための工夫としては、多く学ぶところがあった。リズムを用いたヨルカ氏の授業でも同様のことが起きたが、このような授業を行うと、クラス内の空気が圧倒的によく、知らぬ者同士も隣にいれば声を掛け合うという習慣ができる。フランス語コミュニケーションの授業においては、正しい

文法・発音による一文を発するという前に、まずこの雰囲気作りに成功することによって受講者の言葉を引き出すことができるのだと思われた。

③ Atelier

• Français familier et argotique (Phillipe RICHETTO)

第一週目のアトリエには、三日連続受講で、話し言葉のフランス語、隠語としてのフランス語を学ぶものを選択した。話し言葉と隠語の関係についての概括ののち、さまざまな俗語表現を文例中にみながら、話し言葉における「疑似文法 (pseudogrammaire)」を考察した。専門用語を含めて非常に情報量が多く、授業中は意味を書き取る作業に追われるが、リシェット氏は、プリントやインターネットサイトなどの情報を惜しみなく与えてくれるので、帰国後に勉強し直すことができる。実際、帰国後の会話のなかで話し言葉について学んだ事例をいくつも発見し、プリントを見返すということがあった。口頭表現の教授法や音声に関する授業はその場でしか学べない部分が多いが、講座終了後に各自で辿り直すことができるこのような授業の重要性も再認識するところとなった。

④ Forum

• Comment s'organise la scolarisation des enfants (de) migrants en France ? (Audrey GELIN)

最終週のフォーラムでは、フランス語を全く話さない家庭の子供を就学させるフランスの学校教育制度のあり方について学んだ。フランシュ・コンテ大学を中心としたブザンソン大学区の取り組み (Le centre académique pour la scolarisation des nouveaux arrivants et des enfants du voyage - C.A.S.N.A.V.) で、狭義には国内を転々とする移民家庭の子供を対象とした話である。フランスに足を踏み入れればどのような社会背景を持っていてもすべての子供に義務教育を受ける権利があるという状況において、子供たちと教育者が直面するさまざまな問題が紹介された。子供たちは通常授業に加えてフランス語を基礎から学ぶ特別学級に在籍するが、それぞれの県や市のあいだには共通の枠組みが存在しないことが多い。そのため親の都合で転校する際には何の保証もなく旅立たなくてはならない。慣れ親しんだ特別学級の友人とくつろいだ笑顔を見せる子供たちや、両親がフランス語を解さないことで小学生のうちから担任と親の間で通訳の役割を担う子供たちの姿が印象に残った。

⑤ Activités culturelles

研修の期間中には、夏季休暇中の講座ということもあってさまざまな催しが企画されていた。夜中まで続くサルサやカラオケ大会には、若い研修生たち (教員を目指しているが教授は未経験という高等師範学校の学生が多い) が参加していたようである。8月後半の最後の週には、CLA 総出のイベント Soirée internationale があり、各国の研修生および教師陣が歌や踊りを披露した。自由参加とされているが、夏季講座全体のお別れパーティーと

いう意味もあり、知り合った研修生のほとんどが参加していた。また、ブザンソン市民が招待されており、街の一大イベントといった側面もある。

わたしたち日本人研修生は、日本らしいゆったりとした「ふるさと」、映画音楽としてヨーロッパでも知られる「いつも何度でも」の二部合唱を披露した。わたし自身はピアノ伴奏として参加したが、楽しげな仲間の歌声に寄り添うことができ、心優しい晩となった。日本語を解する観衆はさほど多くなかったはずであるが、言語や音声、リズムに敏感な研修生たちには日本語のうつくしさを感じてもらえたのではないかということが、拍手の大きさから察せられたのも嬉しかった。

会場となる劇場の設備や練習場所に関しては、ひと月ほど前に大学側の担当者に問い合わせたが、きちんと返事をいただくことができ、また滞在中も電話やメールで随時対応してもらえた。忙しいスケジュールのなか練習時間を合わせるなど、この催しへの参加には困難な部分もあるが、参加して良かったというのが率直な感想である。

一緒に練習に向き合ってくれた一人ひとりに、心より感謝したい。